

■透明、軽やかさ、そして存在感をなくすということ

西洋の建築思想の根底である組積造の歴史は、暗い内部に光や通気を取り入れるかという開口部獲得の歴史である。それは建築という mass を透明に置き換えていく作業であり、長い間建築は透明性や軽やかさというものを追求してきた。そして近代に入り、技術の発展によりガラス建築やより細く軽い鉄骨造などの構造が台頭してくると、透明化や軽量化はますます加速度を増し、ついにクリスタルパレスの完成によって完全に透明な建築を手に入れた後も、現代に至るまでより軽やかな建築を目指すための様々な模索がなされてきた。

透明性や軽やかさの追求とは、純粹に透けて見えたり重量のない建築を目指すものではなく、mass としての建築を感じさせないための試みであり、建築の存在感をなくしていくことだと解釈できるのではないだろうか。存在感をなくすとは、実際にそこにあっても、見えているにもかかわらず、認識されない状態である。

「存在感をなくす」という視点から現代建築を見直すと、かつては権威の象徴であった建築が、その巨大さ故に俗悪な大量生産大量消費の産物に貶められて以降、現在では環境や景観との調和・融合を図っていくとする姿勢が一般的になってきている。周辺の景色に溶け込んで自身を主張しないというやり方はまさに「存在感のない」状態だと見える。そう考えると、透明性の模索、軽やかさの追求、景観や環境との融合といったそれぞれの流れは「存在感をなくしていく」という方向に集約して考えることが出来る。

また一方で、原始において、あるいは動物の世界においては「存在感をなくす」ということは非常に原初的な必要条件である。鳥たちは茂みに草や葉に似せた巣を作り、時にフェイクの巣を周りに作って本体を紛れさせたり、入口からは行き止まりに見えるような複雑な構造を作る。ヴァナキュラーな集落においては地産の素材を使って自然に風景になじみ、さらに他からの侵略を防ぐために山や砂漠に紛れたり地中にもぐったりと様々な工夫がなされている。特に住むという行為において、動物的な本能は「存在感を消す」としているのである。そのように考えると、東洋的な思想においては世俗から離れた人間の精神的な高みである「隠れる、隠遁する」ということ、また技術を駆使した透明性や軽さ、環境との融合というものもきわめて原初的な必然に従っているといえる。

都市居住においても「存在を消す」ことはきわめて重要な意義をもっている。かつて地縁によって強く結びつけられてきた近隣との関係を清算すべく考案された団地型の住居は、一枚のドアに鍵をかけてしまうことで外界との断絶を実現した。それは大都市における匿名性の獲得とともに「自由」の具現化された形態として提唱され、理想の住まいとしてまたたくまに普及した。しかし、「閉じこもる」というやり方で地域社会の眼から隠れた住宅は、様々な凶悪犯罪を誘発してきた。現在では安全性やコミュニケーションによる社会づくり、開放的な居住環境の獲得のために「閉じている」住居を否定し、社会に対して開いていくというやり方が一般的になっている。だが一方でバーチャルな空間でのコミュニケーションが発達し、地縁にとらわれたコミュニティからの離脱は進んでいるのも現実である。

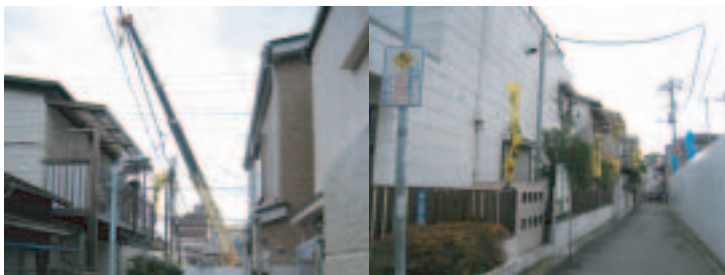
閉鎖的であった住空間を開放的にすることが居住環境において重要であることは、安全性のみならず、社会生活の向上という面においても言えることである。近隣との物理的つながりからプライバシーを確保しつつ、住空間を開放的にすることを可能にするという点において、「存在を消す」ということは非常に有効な手段である。見えていても認識されていないければ、そのプライベートな空間を自由に開放することが出来るからである。

■提案

単身者または2人世帯のための集合住宅を提案する。敷地は巣鴨駅から徒歩10分ほどの木造住宅密集地である。現在東京都によって整備事業が進められているものの、いまだ車の通れない道路がそこに残る地域で、戸建住宅の他、学生や外国人労働者が住む木質アパートなどが混在している。マンション建設が予定されている更地の街区を敷地として選定した。高密度な都市の中で、土地との積極的な関わりを持たずに生きる人々が、匿名で暮らすための集合住宅である。

設計にあたっては、実際に「存在を消している」と思われる建築的事例を収集分析し、以下の7つに分類してその手掛かりとした。

1. 「擬態」 本来とは異なる機能に見えるような外観をしてみせること
2. 「同化」 周辺と高さやスケールなどを揃えて、同じような表情をすること
3. 「掩蔽」 本体を、本体とは無縁のファサードや素材などで覆うこと、はりぼてや自然の中に埋没して自閉していること
4. 「透明」 本体がすけてみえること、光が透過して内部やその向こうの外部が視線的に相互貫入すること
5. 「反射」 うつりこむこと、風景や空を映し込んで建築のヴォリュームを景観に溶け込ませること
6. 「群生」 同じような規模やビルディングタイプのものが集まって一つの共同体のようになること、その中の一つに紛れ込むこと
7. 「陽動」 本体と別のモニュメントや場所に気を引いて、意識を本体に向けさせないこと



DATA

Main Use : housing complex (for single or couple)

Location : SUGAMO Toshima-ku Tokyo

Site Area : 1286.4 m²

Building Floor Area : 364.7

Total Floor Area : 1108.9 (3 stories)

Number of Houses : 49

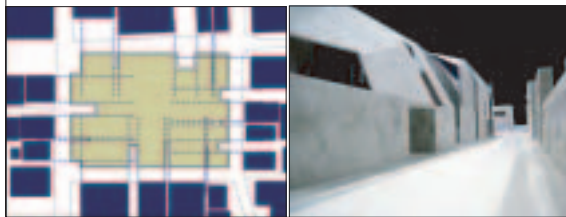


■設計手法と空間的効果

以下に実際に行った設計の手法と、「存在感を消す」という点におけるその空間的効果について述べる。

周辺既存にスケールを揃える

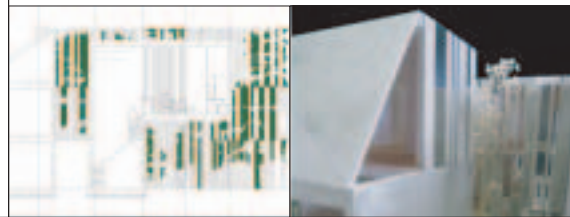
周辺既存のファサードを敷地に映しとり、高さ、スケールを景観に揃える。



それによって景観に統一性と連続性が生まれ、街の風景の中に紛れ込むことが出来る。
【同化】

内庭を植栽で覆う

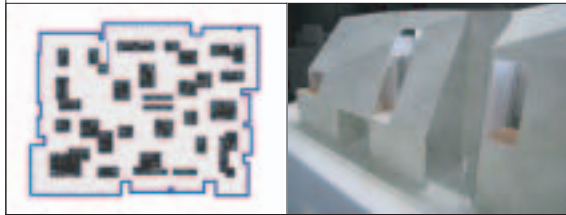
内庭には植栽を多く設け、うつりこむ景色をより明快に作り出す。



建築の向こうに緑が見えることで、実際には見えない外部空間を想起させ、意識をそちらに向けさせる
【陽動、掩蔽】

周辺既存に見かけのプログラムを揃える

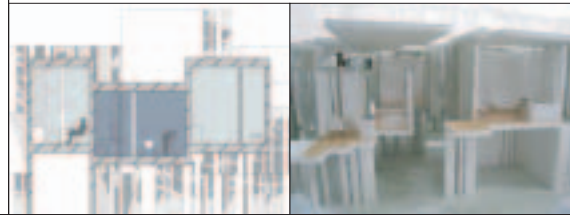
ファサードに既存の皮をかぶり、家型をしてみせることで、記号として「イエ」であることを示す。



これは大規模な集合住宅でありながら街路からの見えでは周辺環境と同じ戸建住宅にみせる効果がある。
【掩蔽、擬態】

見かけの住棟と異なる住戸配置をする

一見ブロックごとに区切られているかのように思える住戸が実は中で複雑に入り組んでいる。



これによってどこからどこまでが一つの住戸なのか認識できないようにする
【擬態】

視線の先にモニュメンタルな風景をつくる

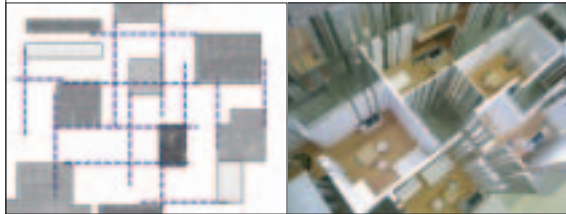
街路からハリボテの中をのぞいたときに、視線が抜けた先に鏡面の映りこみによって展開する内庭の風景に焦点があうようにする。



これにより手前のボリュームやその内部へ向かう意識を薄くさせる。
【陽動】

細かい住居をバラバラとつくる

集合住宅内部の内庭に入ったとき、細かな単位で多くの住戸が分棟になっているのがみえる。



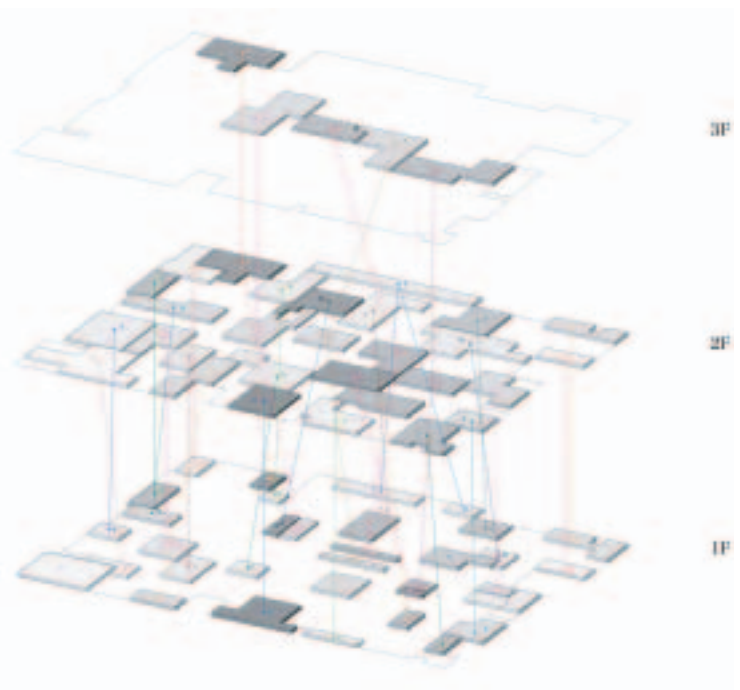
バラバラなものが沢山あるように見せることで、それぞれの住戸が互いの中に紛れ込むことが出来る。
【群生】

見える、透ける、うつりこむ

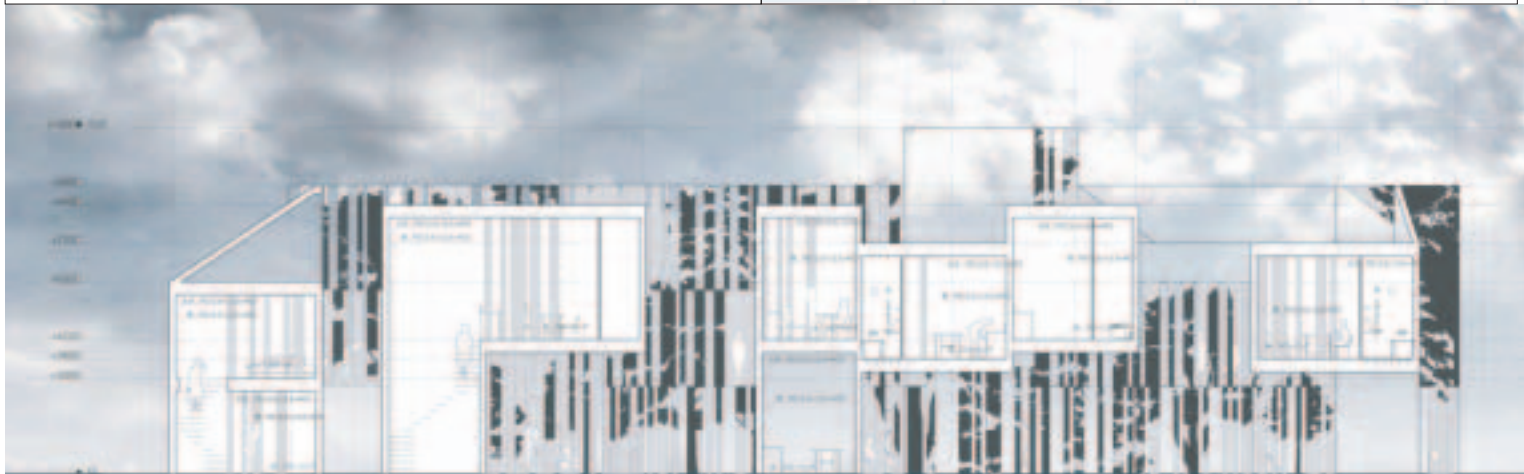
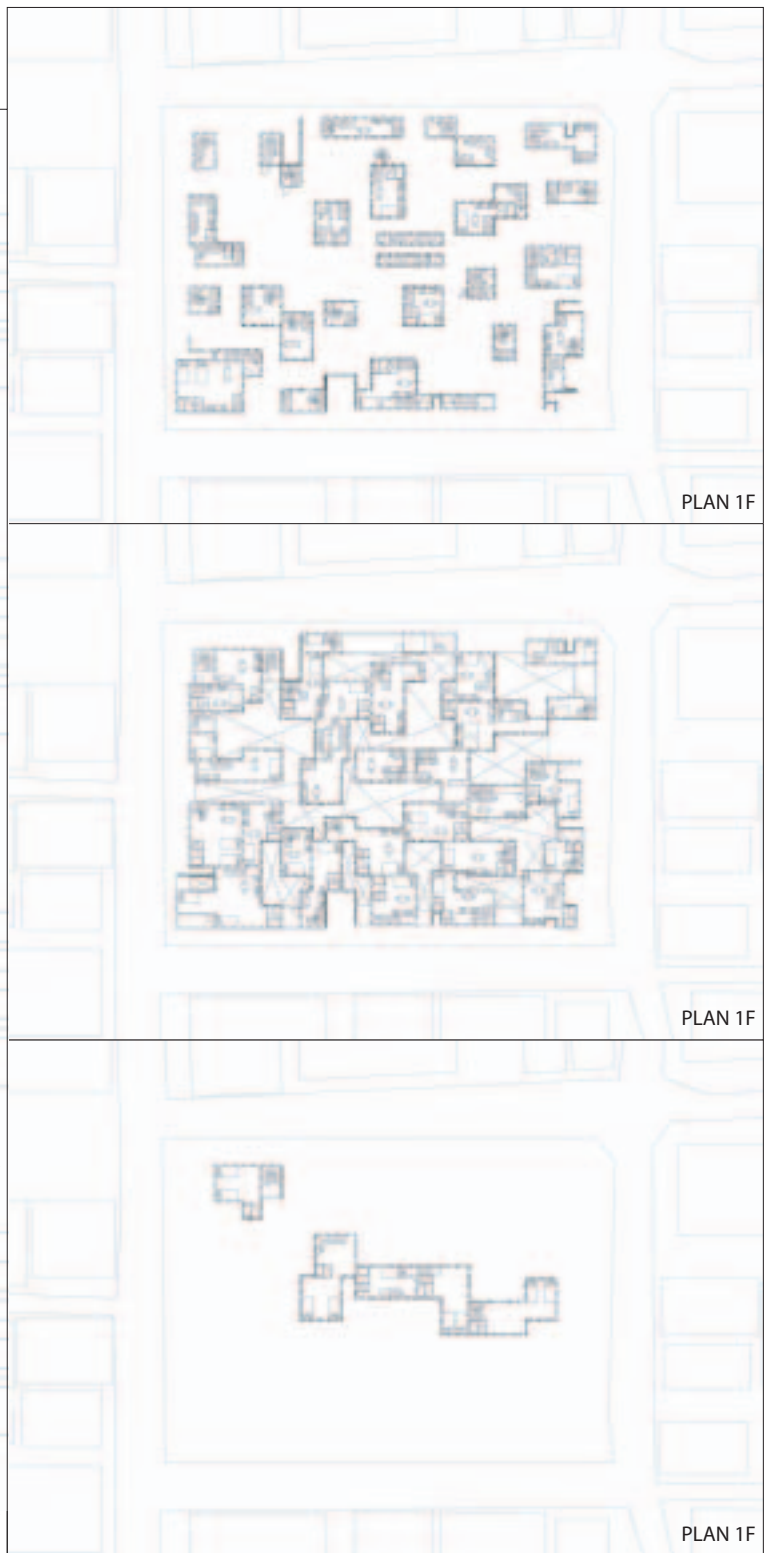
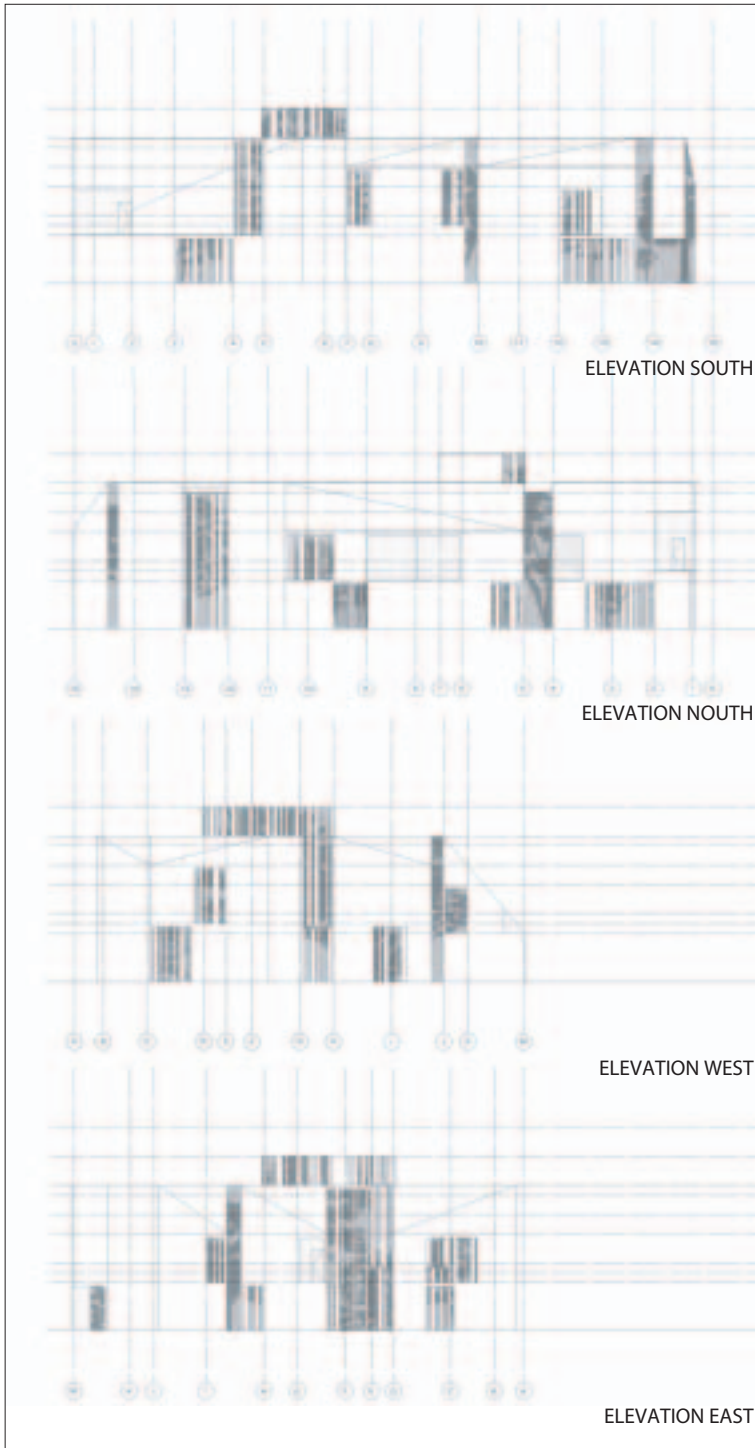
内庭を囲う壁面には、massな部分と鏡面とガラスの開口が混在し、それぞれは等価に扱われる。



開かれた内部が認識されにくくなり、さらに複雑に発生する映りこみによって迷路性を生み出す。
【透明、反射】



住戸配置アクセスメ

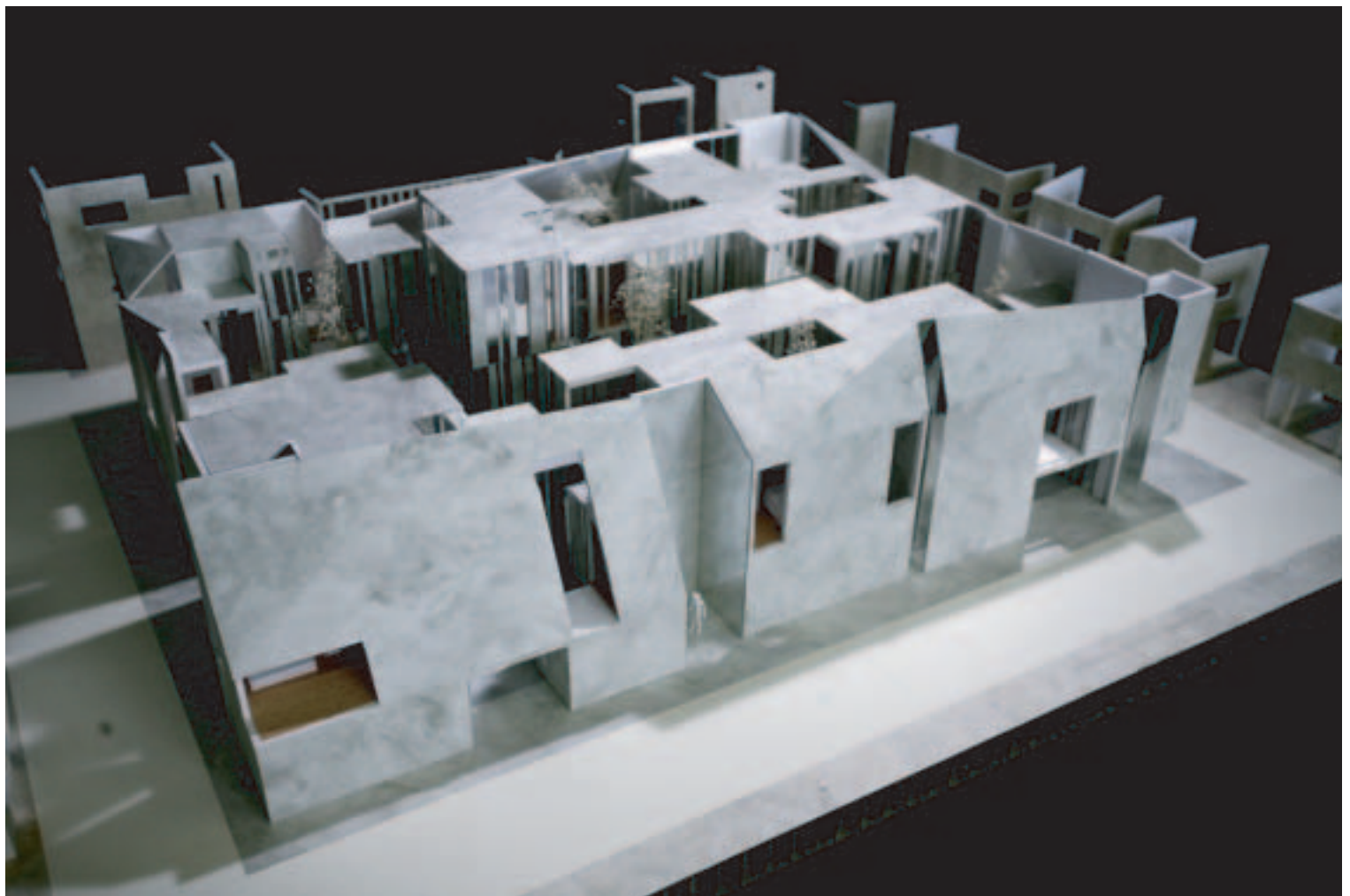




断面から内観と内庭を見る



内庭から見上げる



全体を俯瞰する